

Baby-signing Used between Mother and Child 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤津, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/471

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



母子間で使われるベビーサインの発達的变化1

Baby-signing Used between Mother and Child 1

赤津 純子

AKATSU, Junko

はじめに

子どもは、喃語、泣き、指さしなどの身振り、模倣などを使用する前言語期を経てから、話し言葉期に入り、初語、一語発話、二語発話、多語発話の順に獲得していくことは多くの研究により指摘されている（やまだ, 1982；小椋, 2002；村田, 1984；浜田, 1988）。

話し言葉は、声を発する構音と意味のある事柄を示す記号としての象徴機能という2側面から成り立つと考えられている。

まず、構音に関しては、およそ次のような経過をたどって発達するとみなされている。

生後1ヶ月間には、主に不快な時に示す生理的泣き、他児につられて泣く伝染性の泣き（やまだ, 1982）、げっぷ、しゃっくり、咳の時に発声が見られる。その後、生後2ヶ月から4ヶ月の頃にはクーイングと明瞭な笑い声の形式になる。生後4ヶ月頃からは喃語が始まり、その後ジャーゴン、及び意味は理解せずにオウム返しに他者の発声を模倣する時期を経て、最終的に意味のある語を話すようになる話し言葉期に移行する。

一方、象徴機能に関しては、物を媒介としての母子の相互作用から三項関係（岡本,

1982）が形成しはじめると、その関係を基に、指さし、身振りのような「意味するもの」を用いて意味される対象を示すようになる。ピアジェは象徴機能を「「意味するもの」と「意味されるもの」が分離しつつ結びつく関係となった時の記号機能と考え…」（山上, 1988 p90）言語的な記号は象徴には含まれていないとしているが、「ことばは象徴機能が獲得されたことを表す諸行動の内の一部を占めている」（同, p91）と一般には考えられている。

母子のベビーサインの使用は、母親が、言葉を伴った簡易化した手話を用いて子どもとのコミュニケーションを図ろうとするところから始まる。ベビーサインは自発的な象徴的身振りと異なり、意識的に大人が子どもとのコミュニケーションに導入し、やがて子どもも自発的に用いるようになる人工的な象徴的身振りである。

赤津（2007）では、一般的な手話、及びチンパンジーをはじめとする類人猿の研究で用いられる手話とベビーサインとの機能的な相違と、集団保育の中でどのようにベビーサインが使われているかについて概説した。ベビーサインはアメリカで開発された育児法であり、子どもの発達を考慮して手話や手話を

キーワード：ベビーサイン、縦断的研究、方法
Key words : baby-signing, longitudinal study, method

単純化した形から始まった。手話は単語としてだけではなく、文章の機能をも果たしている（佐々木，1995）。聴覚障害者には音声言語を伴わせても聞こえない場合が多いが、ベビーサインを習っている子どもは音声言語と共に提示されるベビーサインから、視覚と聴覚の両方の情報を得ることができる。

集団保育に用いられるベビーサインについては、ベビーサインを保育に用いている保育所の保育者と保護者の意識調査（赤津，2008；2010）において、子どもとの意思疎通が円滑に図られ、保育、育児の効果が上がったこと、子どもの精神的な安定もみられるようになったことが示された。一方で、ベビーサインを覚えることの負担を感じる保育者がおり、また子どもから知らないベビーサインを示されて応答的な対応ができず落胆する保護者も見られた。

赤津（2009a；2009b；2013b）では、集団保育で用いられるベビーサインについて0歳児クラスと1歳児クラスの6か月間の縦断的調査から、ベビーサインの発現の様相を概観した。保育者が想起記録した、クラスの子ども一人一人の自発的に用いるベビーサインに関する資料を分析した結果、ベビーサインは最も早い者で生後9ヶ月から出現すること、生後12ヶ月から増え始め16ヶ月がそのピークであること、そしてその後徐々に減少するが、生後25、26ヶ月頃に再度現れることが分かった。また、集団保育の中では、獲得されるベビーサインの種類は、挨拶、要求・指示、形容・修飾が先で、名詞は後からであることが明らかになった。

これらのことは集団保育という保育形態に特徴的なことなのか。家庭児についての実態を把握し、家庭児との比較をすることにより、

特殊性と普遍性を検討することも必要である。そこで、家庭での育児の中にベビーサインを取り入れている母子を対象とした縦断的な資料を収集することにより、子どもの言葉の発達過程とベビーサインの発現過程とがどのように関連しているか、両者の発現順序とそれをもたらす要因は何か、ベビーサインは言葉の獲得にどのように寄与しているのかということを探ることを目指して第2次調査を始めた。

赤津（2013a；2014；2015a）では、家庭児とその母親の用いるベビーサインについて検討した。赤津（2013a）では発達の遅い子どものベビーサインの様相と、その母親の意識について報告した。概ねベビーサインを育児に使用したことについて母親は満足している。

赤津（2014）では発達の速い子どもについて、ベビーサインが話し言葉の出現に先行することが観察された。

二卵性双生児に関する調査（2015a）では、同じ家庭環境を持つとみられる二卵性双生児がどのようにベビーサインを用いてコミュニケーションを行っているのかを生後19ヶ月から生後30ヶ月の期間にわたって縦断的に観察を行った。双生児ふたりが互いにベビーサインを使っていることがわかり、両者の話し言葉の発現の仕方とベビーサインの発現の仕方は共に異なっているが、それらの間には何らかの関連があるのではないかと示唆された。

また、赤津（2015b）ではベビーサイン教室に通う母親の意識調査を行い、多くの母親が子どもと積極的に関わるようになり、母親の育児態度により影響を及ぼすことが示唆された。

集団保育児、及び家庭児に関するこれまで

の調査から、ベビーサインが自然発生的な象徴的身振りと異なる点に関しては次のことが考えられる。

①ベビーサインは個々の家庭において家族間で通用するだけでなく、ベビーサインを学習した使用者間で使える共通の手振りである。

②おとながまず学習し、それを子どもに教示する。おとなが教示する時には、手話と異なり、それを表す言葉が添えられる。

③おとなからは毎回同じベビーサインが提示される。

④表される対象と手振りとの一対一対応が明確である。

子どもの自然発生的な象徴的身振りは、おとなが教示するところから始まるわけではない。子どもから自発的にオリジナルの身振り、手振りを始める。そして子どもが示す、その形態は毎回同じものであるとは限らない。何を象徴しているのかを相手に理解されにくい場合もある。一方ベビーサインは、おとなから言葉を添えられて毎回同じ形態で示されるために、より早く習得され、かつ言葉との対応がなされやすいという側面がある。しかしながら、その反面、子ども自身で考え、工夫する機会や、範疇化されにくい微妙な意味合いや状況の描写に関する表現を行う機会を奪ってしまう可能性があることも指摘されている。ベビーサインに関わる弊害についてはGwyneth Doherty-Sneddon (2008) にまとめられている。

言葉を話す前の子どもの思考、感じ方、欲求などをセンシティブに捉えられるおとなには、このようにベビーサインを子どもに習得させることは、時間的にも労力的にも無駄なことであるかもしれない。しかしながら、な

かなかこの時期の子どもの気持ちを察知できないおとなにとっては、狭い範囲ではあるが、より理解しやすい形で、子どもが感じ考えていることが表現されるベビーサインは、一定の利便性を持つと考えられる。

本論文と次論文では、ベビーサインを育児に用いている家庭の子どもたちのうち、赤津(2013a; 2014)で対象とした心身の発達速度の異なる2名について、ベビーサインが言葉の発達にどのように関わり、どのように寄与するのかを多面的に入手した資料を提示し、考察する。紙面の都合上、本稿では主として、入手した資料と二人の対象児の発達上の相違に関連した資料を提出する。

問題

発達速度の異なる2名の子どもが用いるベビーサインの働きや出現の仕方を比較し、発達速度の遅い子どもにとって、ベビーサインがどんな役割を果たし、ベビーサインを用いることがどのような効果をもたらすかを検討する。

方法

まず、2名の対象児についての調査内容、心身の発達の違いについて報告する。

(1) 調査時期および対象者

調査は2010年7月から2011年12月にわたって行われた。

調査対象者は生後6ヶ月からベビーサインを習っている男児A(赤津, 2014)とその母親、及び生後9ヶ月からベビーサインを習っている男児B(赤津, 2013)とその母親である。A、B共に両親と子どもの3人家族の第1子である。

この2組について1ヶ月に1度家庭訪問をして縦断的に観察を行い、資料を得た。観察期間はAに関しては生後16ヶ月～29ヶ月の14ヶ月間、Bに関しては生後14ヶ月～31ヶ月の18ヶ月間であった。

Aについては14回分、Bについては、15ヵ月目、18ヶ月目、22ヶ月目、28ヶ月目は訪問家庭の都合により観察が行えなかったため、18ヶ月間で14回分の資料が得られた。

(2) 入手した資料

毎回の訪問では、母子で自由に遊んでいる場面（約60分間）のエピソード記録とビデオ撮影、及び母親への聞き取り調査（母子が使用するベビーサインの内容・ベビーサインの特徴とそれにまつわるエピソード・子どもの発語の特徴・ベビーサインについての母親の各時期の感想について質問し回答を得る）を行った。また毎回KIDS（乳幼児発達スケール）を実施し、母親から回答を得た。

1) KIDS

KIDSに関して、AとBそれぞれの縦断的資料の比較を行うことにより、両者の心身の発達的な相違を調べた。これにより乳児期に、心身の発達速度にそれぞれ特徴的な相違のあるAとBがどのようにベビーサインを学び、自ら使用するようになるのか、その過程の両者の様相から、ベビーサインの獲得過程について、普遍的に言えること、及びベビーサインの効果、弊害について検討する。

KIDSは、理解言語・表出言語・概念・対子ども社会性・対成人社会性・運動・操作・しつけ・食事の結果の9カテゴリーの項目から成っている。ビデオセッション終了後にこれらについて、1項目ずつ読み上げ、母親か

らの回答を記録した。これらは5問続けて不正解の場合中止した。また家庭訪問中に明らかに研究者によって確認できていた項目については質問を省略し○とした。

2) エピソード記録

家庭訪問時の、主な活動内容（積み木遊び、かくれんぼなどの遊び方、授乳されたか、おやつを食べたか、排泄処理をしたかなど）、母子のやり取りの中での特徴的な出来事、子どもの発達的な特徴として運動能力（はいはいをどのようにしているか、つたい歩きや踏ん張るような歩き方などの歩行の様子はどのようなかなど）・言葉（喃語を話しているか、それはどのような形態か、一語発話、二語発話、多語発話の発現があるかなど）・遊びの仕方（どのような玩具で遊んでいるか、絵本はどのように扱っているかなど）等の側面に関して、ビデオセッションの終了後にエピソード記録を行った。

3) ビデオ撮影

A 撮影の方法

ビデオの撮影は基本的には非交流的観察の形式であったが、母親から話しかけられたり、子どもからの働きかけがあった場合には言葉を交わしたり、応答したりしてその場の流れが不自然にならないように配慮した。

ビデオカメラは、三脚に付けて携帯し、母子の移動に伴って移動させ撮影した。場合によっては、地面に固定することもあった。

B ビデオ撮影の内容分析

母子のやり取りのうち、母親がベビーサインを子どもに提示した時の子どもの反応、子どもがベビーサインをした時の前後の様子等

ベビーサインが発現した場面の前後についてのエピソードを抽出した。

その中で、母子の表情表出（快・不快）、母親が提示したり、子どもが使用したりしたベビーサインの種類や使い方、発声・発話の内容、行動（遊び；絵本使用、玩具使用、食事；授乳やおやつのおやつの食べ方、その他の母子間のやり取り）を分析対象とした。

4) 母親への聞き取り調査

ビデオセッション終了後に、母親にインタビュー形式で聞き取り調査を行った。

内容は下記の4項目である。これは訪問時点以外のその頃の子どものベビーサインに関する情報を得るために設定した。

A 母子が使用するベビーサインの内容

ベビーサインの内容については、赤津・三浦（2010）のTable4「保育者の習得しているベビーサイン（130個）の保育中の使用頻度」（p43）に出ているベビーサインの種類を基礎として、それぞれのベビーサインを①母親のみが使用している、②母親と子どもが使用している、③子どものみが使用している、の3側面から問い、記録した。また、これらのベビーサイン以外に母子が使っているベビーサイン、母子間で独自に使っているベビーサインについて聞き取り記録した。

130個のベビーサインは日本ベビーサイン協会の講師認定試験に合格した保育士たちが講習会で習得したものである。これらは、おとなと子どものやり取りの中でよく用いられると想定されるベビーサインである。今回の調査では集団保育で使われるベビーサインと家庭内で使われるベビーサインとを比較することを念頭に置いている。

B ベビーサインの特徴とベビーサインにまつわるエピソード

母親が前回の家庭訪問からの過去約1か月間に気づいたベビーサイン使用に関してベビーサインの特徴（子どもから示すものが増えてきた、二語発話的ベビーサインの使用が見られるなど）とベビーサインにまつわる他者（母親だけではなく、祖父母等の親戚や交流のある友達など）とのやり取りや子ども自身に関するエピソードの有無について質問し、あった場合にその内容を記録した。これは観察時に見られないベビーサインに関する事柄を補填するために設定した項目である。

C 子どもの発話の特徴

母親が前回の家庭訪問から1か月間に気づいた喃語、一語発話、二語発話などの出現やその使い方、子どもの発話の特徴の有無について質問し、気づいた内容があった場合にその回答を記録した。これは子どもの発話とベビーサインの形態の変化との関連を調べるために設定した項目である。

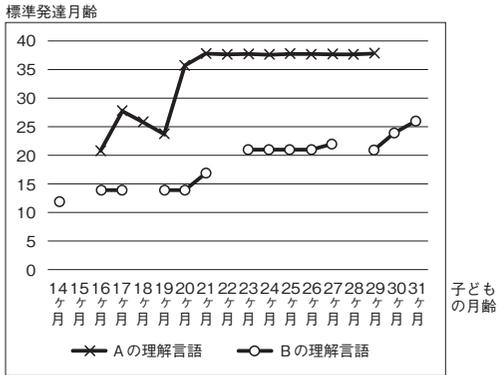
D ベビーサインについての母親の各時期の感想

ベビーサインを使うことについて、母親自身はどのように感じているかを質問し、その回答を記録した。これは子どもの成長に伴い、ベビーサインに関する母親の捉え方の変化を見るために設定した項目である。

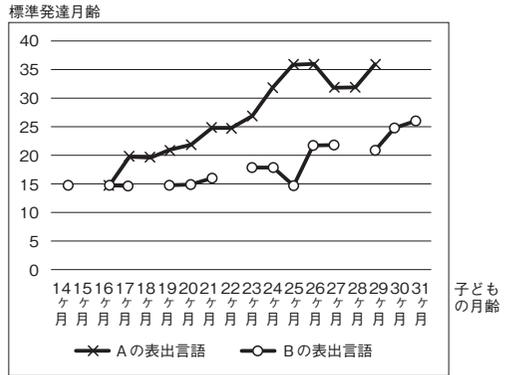
KIDSに関する結果と考察

KIDSに関し、Fig.1に理解言語・表出言語・概念・対子ども社会性・対成人社会性・運動・操作・しつけ・食事の9項目の結果を示す。

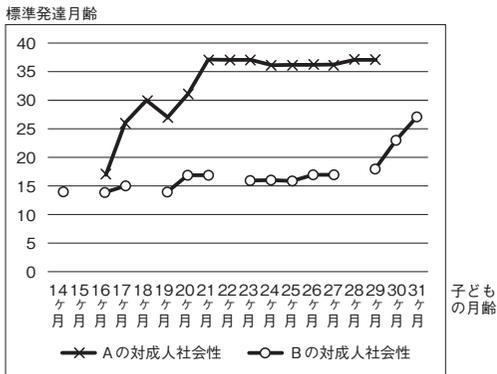
①理解言語



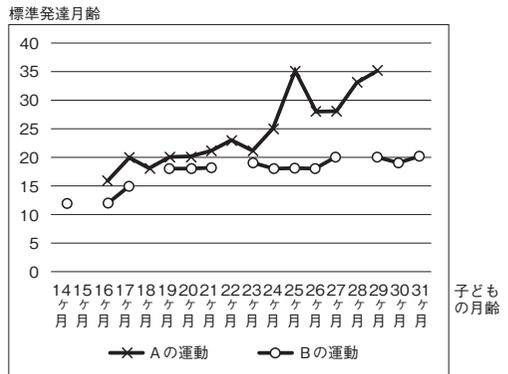
②表出言語



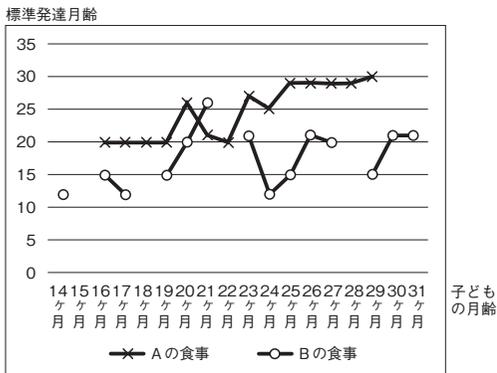
⑤対成人社会性



⑥運動

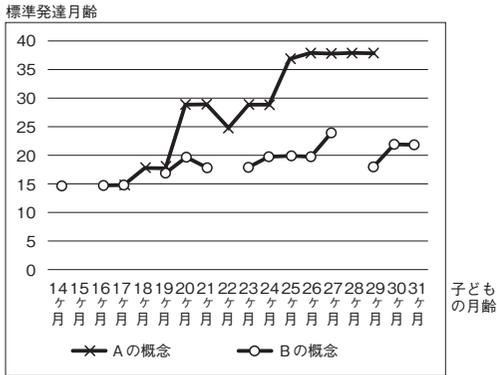


⑨食事

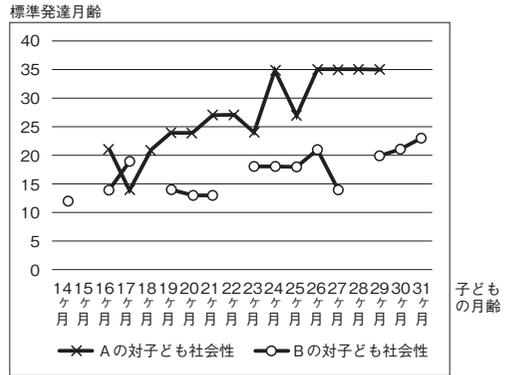


母子間で使われるベビーサインの発達的变化1

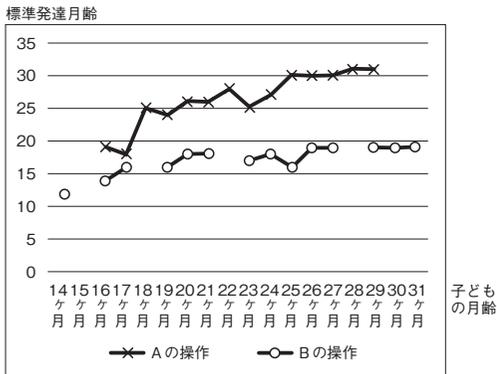
③概念



④対子ども社会性



⑦操作



⑧しつけ

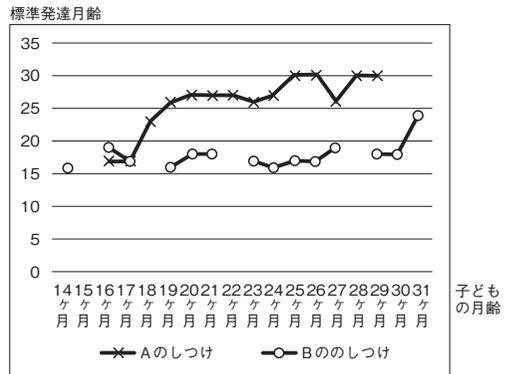


Fig.1 A、Bの理解言語・表出言語・概念・対子ども社会性・対成人社会性・運動・操作・しつけ・食事の結果

理解言語については、Aは全ての月齢で標準発達月齢より高く、特に生後20ヶ月以降は標準水準を10ヶ月以上上回っている。Bは全ての月齢で標準より5ヶ月ほど下回っている。表出言語については、Aは生後23ヶ月まで標準をやや上回り、生後24ヶ月以降はほぼ5ヶ月以上上回るようになる。Bは生後26か月まで標準水準20ヶ月に達していない。生後30ヶ月でようやく標準水準25ヶ月に達する。

概念については、Aは生後19ヶ月までは標準水準より低い、生後20ヶ月から急に伸び、5ヶ月以上標準を上回るようになる。Bは生後14ヶ月の時点から17か月間を費やして、標準水準20ヶ月にゆっくと近づいている。

対子ども社会性については、Aは生後17か月目に標準水準を下回るがそれ以外の時期にはやや標準を上回り、特に24ヶ月以降は生後25ヶ月を除き、全て標準水準35ヶ月に達している。Bは生後17ヶ月目には標準を上回るが、それ以外の時期は標準を下回り、生後31か月目であっても標準水準25ヶ月に届いていない。

対成人社会性については、Aは生後17ヶ月以降は標準水準を5ヶ月から15ヶ月上回っている。Bは生後14ヶ月から生後29ヶ月まで標準水準15ヶ月前後であるが、生後30ヶ月から標準水準20ヶ月を超えるようになる。

運動については、Aは生後25ヶ月目に関しては標準より10ヶ月高く突出しているが、それ以外の月齢ではほぼ標準的に発達している。Bは生後17ヶ月までは標準水準を2、3か月下回り、生後20ヶ月以降は標準水準18ヶ月から20ヶ月の間でほとんど進歩が見られない。

操作については、Aはほぼ毎月、標準水準を5ヶ月ほど上回っている。Bは生後17か月から生後31ヶ月の間に、標準水準15ヶ月から20ヶ月へゆっくと近づいている。

しつけについては、Aは標準をやや上回りながら標準水準30ヶ月に到達している。Bは生後16ヶ月時にはAに優り、また標準水準を上回っているがそれ以外の月では標準水準15ヶ月から25ヶ月にかけてゆっくと進んでいる。

食事については、Aは標準水準をやや上回りながら標準水準30ヶ月に到達している。

Bについては、生後21ヶ月目は標準水準より6ヶ月ほど上回っているがそれ以外の月は標準水準15ヶ月から20ヶ月前後で変動している。

月齢ごとの結果を比較すると概ねAの方がBよりも成績は良い。母親の主観的回答ではあるが、Bの結果はどの項目についてもAに比べスローペースであることがわかる。

引用・参考文献

- 赤津純子 2007 象徴的身振り（ベビーサイン）の保育に与える影響 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 第7号 p145-153
- 赤津純子 2008 保育所で使用される象徴的身振り（ベビーサイン）の分析1—指導法及び保育者・保護者の意識— 教育心理学会第50回総会発表論文集
- 赤津純子 2009a 保育所で使用される象徴的身振り（ベビーサイン）の分析2—食事場面の分析— 教育心理学会第51回総会発表論文集
- 赤津純子 2009b 集団保育における象徴的身振り（ベビーサイン）の発達の變化 発達心理学会第20回大会発表論文集
- 赤津純子・三浦香苗 2010 集団保育に取り入れられたベビーサインに関する研究—保護者・保育者の質問紙調査結果の報告— 昭和女子大学生生活心理研究所紀要 Vol.12 p39-49
- 赤津純子 2013a ベビーサインを習っている母子のコミュニケーションの様相 発達心理学会第

母子間で使われるベビーサインの発達的变化1

24回大会発表論文集

- 赤津純子 2013b 保育園児に対するベビーサインの教授時期に関する考察 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 第13号 p133-144
- 赤津純子 2014 ベビーサインから話し言葉へ 教育心理学会第56回総会発表論文集
- 赤津純子 2015a 二卵性双生児の情報伝達の円滑さとベビーサイン 発達心理学会第26回大会発表論文集
- 赤津純子 2015b ベビーサインの使用が母親の育児態度に及ぼす効果について 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 第15号 p117-126
- Gwyneth Doherty-Sneddon 2008 The great baby signing debate *The Psychologist*, Vol 21(4), Apr, 2008 p300-303
- 浜田寿美男 1988 第I部 1ことば・シンボル・自我 岡本夏木(編著) 認識とことばの発達心理学 ミネルヴァ書房 p3-36
- 小椋たみ子 2002 第5章2 語獲得期と文形成期の言語発達 1) 語彙発達 岩立志津夫・小椋たみ子(編著)言語発達とその支援 ミネルヴァ書房 p79-84
- 岡本夏木 1982 子どもとことば 岩波書店
- 佐々木正人 1995 手話 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房 p315
- やまだようこ 1982 ことばの前のことば 新曜社
- 山上雅子 1988 第III部 4発達の遅れる子どもとことば 岡本夏木(編著) 認識とことばの発達心理学 ミネルヴァ書房 p85-107

謝辞

本論文の調査にご協力いただきましたお母様、お子様方、ご指導・ご助言くださいました千葉大学名誉教授三浦香苗先生に心より感謝申し上げます。